

---

# かささぎの、渡せる橋に願いをのせて。

文樹妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かささぎの、渡せる橋に願いをのせて。

### 【Nコード】

N4435M

### 【作者名】

文樹妃

### 【あらすじ】

一日遅れですが、七夕のお話です

些細なことで口げんかになり、飛び出してしまった娘を追う母親が出会った不思議な男。そして思いもかけない願いが叶うことになるのだが、不器用な大人たちに捧げる、微ファンタジー。

「ねえねえ、ママ。うちにはひこぼしさまは来ないの？」

突然の無邪気な問いは、保育園からもらってきた小さな笹に二人で飾りつけをしている時のものだった。

先生と作ってきたらしい折り紙のふきながしやちようちん、星などに混じって、小さいながらも存在を主張する織姫と彦星。

わずかに眉の垂れ下がった彦星の顔になぜか責められているような気がして、視線を逸らした。

「彦星さまはねえ、お空の織姫さまのところに来るものなのよ。美空も知ってるでしょう？ 今日、七月七日の七夕にだけ二人が会えるんだってお話」

向かいに座っていた美空と目を合わせて、しゃがみこんで言ってもやると、無垢な笑顔がすっかりと頷く。

「うん。先生がかみしばいしてくれたよ。だけどねーえ、おうちにも来てくれたらいいのになって思ったの。天の川がないからだめなのかなあ？ それとも美空がじゃまだから来ないのかなあ？」

「何言ってるの、そんなことないよ」

「じゃあどうしてえ？ だって美空、パパほしいもん。じゅりちゃんやまなかちゃんや、みーんなほいくえんのおともだちの家にはパパいるのに、なんでうちにはいないの？」

去年までもまだなんとかがまかせたのに、段々すっかりしてきた美空。四歳といてもその小さな頭でいろんなことを考えて、一日一日でどんどん成長しているんだなあなんて変な感慨にひたってしまう。

一番困る二つのキーワード、兄弟がほしい、とこのパパの問題についてだけは、知れたがり屋の美空に答えてあげることができない自分が口惜しかった。

「ごめんね、美空。さびしい思いさせちゃって……でもパパはね、

お仕事で外国の遠いところにいるから帰ってこられないんだよ」

結局いつものようにこう言うしかなくて、頭を撫でる。

けれど今日の美空には通用しないようだった。

「じゅりちゃんが言ってたよ、外国でもおーいところでも、飛行機に乗って会いに来られるんだって。なんでうちのパパだけ来ないの？ そんなのおかしいよ。美空、そんなパパだったらいらない！ だからひこぼしさまに来てもらおうと思ったんだもん。パパもひこぼしさまも来られないなんて、美空、こんなお家きらい！」

二つに結んだ髪の毛をぶんぶん振って、唇をとがらせた美空が笹飾りを庭に投げつける。

つい、かっとして仁王立ちになった。

「そんなこと言っちゃだめでしょ！ お家がきらいな子は悪い子よ！」

叱りつけられて、一瞬びくつと肩を震わせながらも、真っ赤な頬で睨みつけ、今にも涙があふれそうな瞳で美空が口を開く。

「ママもきらい！ 美空、こんなお家だいきらい！」

そう叫んで裏戸から外へ飛び出してしまった。

嫌いだと言われたのなんて初めてじゃない。でも、話の内容だけにさすがにショックで、一瞬放心して立ち尽くす。

まだ日の長い夏だとはいえ、美空が駆け出していったのが裏の竹林だったから、あわてて追いかけた。

小さな背中に追いつくことはたやすいはず　そんな油断があったのかも知れない。

けれどそれを差し引いてもおかしいのは確かだ。

家から竹林までは大人の足でも一分、子供でも五分もあれば余裕でたどり着ける。

美空が出て行ってからすぐに追いかけたというのに、その姿を見

つけることができないのだ。

田舎だから、周囲も見知った人々ばかりだから、なんて考えが甘かったのだろうか。

竹林に一人で行かせることはなかったものの、その周辺の田んぼのあぜ道くらいなら、先に出させてしまっていた自分を強く反省した。

四歳の美空、聞き分けは段々よくなってきても、まだ何をするかはわからない年齢。

それなのにどうして出て行くのを止めなかったのだろう。

いくら探しても見つからないあせりで、脳裏に新聞記事の恐ろしいニュースがちらつく。

もしも美空に何かあったら　この世で唯一の宝物が両手からこぼれ落ちていく想像に襲われて、走っているのに冷たい汗が流れ出す。

もつと優しく言い聞かせてやっていけば、いや、そもそも幼い美空には何の罪もない。

自分たちがうまく行かなかったことなんて、理解させてあげられるわけもなかった。

たった一度の浮気を許せなかった自分、最後まで許しを請えなかった彼　どちらが悪いか決めることも今となっては無意味だ。

まだ歩き始めたばかりの美空を残して家を出て行った彼に、彦星なんてロマンチックな名前を当てはめた美空の言葉が余計に切なかつた。

「美空、美空……！！　お願いだから出てきてよ！」

叫んで、サンダルのまま走り続けた足はあちこちが痛み、休息を求めるように訴える。

けれどそんな欲求に答えている場合ではないのだ。

行事ごとの時くらいは、と早めに会社を出て、せつかく二人で七夕を祝おうとしたのに。

いつもより早いお迎えに満面の笑みで飛びついてきてくれた美空。

帰る途中で寄ったケーキ屋で、嬉しそうに選んでいた美空。多めにもらった折り紙の飾りを、これはママにだよ、と言ってくれた美空。

全てが頭に回って、自分を責めた。

警察、という単語が浮かんで、ポケットをまさぐってから、さつき帰宅してすぐに携帯を食卓へ置いてしまったことを思い出した。腕時計もつけていなかったから、既に探し始めて何分がたったのかもわからず、一時間以上経っているような気がする。

そもそもこの竹林がこんなに広がったのだろうか、と疑問に思うくらい走り続けていた。

まだ空が夕闇を迎えていないことだけが救いだったが、それも時間の感覚を麻痺させるものかもしれないなかった。

「美空、お願い……誰か、神様　！」

何かにすがりつくように、しゃがみこんで祈る。

近くで鳥の羽音が聞こえた、と思った瞬間のことだった。

目の前を影が覆った。

背後を何気なく振り返った私は、突然そこに現れた人物に息を呑んだ。

「……あつ、あのっ……女の子、見かけませんでしたか？　四歳の子で、ピンクのワンピースに、髪には星のゴムして、二つ結びで

「  
我に返って、並び立てる私を前に、その人　少年と青年の中間ぐらいの男の子は、くつと笑った。

笑われたことで言葉を止め、切羽詰った状況を理解しない彼に戸惑った私は、それよりもまず、その不思議ないでたちに目を奪われてしまう。

よくよく見ると、真っ黒の長髪を後ろで束ねていて、紺色の衣服

は腰の辺りを白い紐で結んだ、何やら中国風の古めかしい着物を着ている。

長身で細身の体型と、整った顔立ちが涼しげで思わず見惚れかけから、そんな自分を戒めるように首を振った。

「美空<sup>みく</sup>つて言うんですけど、本当に見かけませんでしたか？ 今頃一人で泣いてるんじゃないかって……心配で」

黙ったままこちらを見ている男に懸命に訊ねていた私は、ふと思い浮かんだ可能性に背筋が寒くなった。

そうだ、最近の子供を狙う変質者もたくさんいる。この目の前の男がそうでないと断言なんかできないのだ。

もしかしたら、この男にどこかへ連れ去られたとか……！？ 不安と衝撃と疑念と、様々な思いが駆け巡る。

あと少して問いつめかけた私の衝動を止めたのは、彼の不意の行動だった。

私のことなど眼中にないかのように、周囲の竹を一本一本見つくるい始めたのだ。

軽く押してみたり、指先で叩いてみたり、太さや葉を見比べてみたり そして何かに満足したのか、一本を選んで微笑んだ。

「うん、これでいいかな」

なんて呟いているあくまで軽い調子の言葉や態度は、どう見ても彼が行方不明の美空をどこかに隠したとか、何か恐ろしいことをしでかした人物のようには見えないのだ。

でもだめだ。用心しなきゃ。けどもしもこの人が関わっていないんだしたら、本当に警察や近所の人に知らせるべきじゃないだろうか。

自分の体を両腕で包んで、落ち着くように力を込める。

取り乱してはいけない。それで美空が見つかるわけじゃないんだから。

そう言い聞かせた、次の瞬間だった。

「あのさあ」

突然疑いを抱いている人物から呼びかけられて、びっくりと身を縮める。

言葉も出ないでいる私をまじまじと見て、彼はまた不思議なほど鮮やかな微笑を浮かべた。

「今夜、晴れると思う？ それとも曇ると思う？」

「は？」

一体この男は何を言っているのだ、そんな思いがそのまま顔に出たのであろう私を見ても、何も気にせず空を見上げてみせる。

今日は朝から雲ひとつない快晴で、梅雨のまだ明けきっていないこの地方でも珍しいくらいにいい天気だった。

だから夜になってもきつとそれは変わらないはずで そんなことを思いかけて、それどころではないと気色ばんだ。

「あの、私は今子供を捜してて」

また話を始めようとする私を制するように、綺麗な長い指を立てて、微笑む彼。

飄々とした顔は、もしかしたら最初の印象よりももっと年齢を重ねたものなのかも、なんて頭の端で思った。

「まあ、いいから答えてみてよ。見事に当てられたら、返してあげる」

紺色の衣服 よく見たらそれは長袖で、暑そうなのにも関わらず、汗一つかいていない。

妙なところに気をとられた後、すぐにその言葉に気づいた。

「返してあげるって……やっぱりあなたが美空を！」

いい人そうな笑顔で、やはり変質者だったのか。可愛い娘をこんな男にどうにかされたのかと思うと、頭に血が上った。

「どうということなの！ 美空はどこ！？ けっ、怪我はないんでしょうね？ 変なことしてたらただじゃおかないわよ ちよつと、

答えなさいよ！」

どこにいるのよ、と詰め寄り、細身の腕を掴んで揺さぶる。

あわわわ、などとふざけた声を上げてがくがく揺さぶられていた



彼は、咳き込みながら私の腕を逆に捕らえた。

「びつくりしたあ。そんなに怒らなくても何にもしてないよ。僕はむしろ、正義の味方なんだから」

背中に垂れていた長い髪の毛がいつのまにか肩から落ちている。

それを何気なくはらって、彼は笑った。

「せ、正義の味方ですって？ おかしなこと言っていないでさっさと美空を出しなさい！ 早く！」

「出せ出せって、そんな。ものじゃないんだからさ」

目を剥いた私から素早く離れて、先ほど選んだ竹にもたれてあきれたような声を出す。

ふざけた態度であるにも関わらず、なぜか一瞬声がつまった。

「いくら子供って言ったって、あなたの所有物じゃないんだ。あの子にだって、自分の心があって、感情がある。そうだろう？」

「な、何なの、あなた……」

まるで先ほどの美空とのやりとりを見られていたかのような、言い方だと感じた。

それは後ろめたい自分の心をそのまま刺激して、言葉を奪う。

「あの子が自分のためなんかじゃない、あなたのために願いを書いたことも知らないんでしょう？ それなのに、自分の感情だけで叱り付けた。あの子は泣いてたよ。だから 隠したんだ」

言った瞬間、剣呑な色が閃いた黒い瞳に見据えられ、少し後ずさった。

気のせいじゃない。確かに彼は、美空のことも、さっきのケンカのことでも知っている。

怒りのせいで感じなかった恐怖が、一筋の汗となって背中をつたう。

どうして知っているのかなんてわからないけれど、もしかしたら外で見ていたのかも。この男が凶悪な犯罪者だったら、一体美空は。

浮かぶ可能性は冷や汗となり、膝は途端にがくがく震え出した。

腰を抜かしそんな恐怖に打ち勝ったのは、母性だけだった。

「隠した、なんて 私たちのことがあなたに何の関係があるって言うの？ 早く美空を返して！」

無事な姿を見せてよ !

心から叫んだ時、それ以外の思いは何も残っていなかった。

ただ、大事な美空をこの手に抱きしめたい。無事を確かめて、いつものように手をつないで二人で家へ帰るんだ。

それだけを祈るように考えていた私は、いつの間にか怪しすぎる男の両手を握り締めてうなだれていた。

「もつと意地悪してやるうかと思っただけど……まあいいや。あの子もそろそろ家に帰りたいがってるしね」

だから早く答えてよ、と耳元で囁かれた言葉に、私はもう力なく頷いていたのだ。

「今夜は晴れると思う？ それとも」

いつの間にか夕焼け色に染まり始めた空には、まだ一つの雲すら浮かんでいない。

なのに、なぜか頭に浮かんだ答えをそのまま口にしていた。

「今夜は……」

伝えた瞬間、肩をすくめた男が笑う。

楽しげに続く笑い声は、竹林全体に響いていくような気がして。

辺りを見回している間に、男は忽然と姿を消していたのだ。

驚愕に声もでないまま、その姿を探す目に映ったのは、さきほどまで存在していたものの、不在。

そう、ついさっき男が選んだ竹が、まるで最初から生えていなかったかのように、消えていた。

「ママ」

後ろから聞こえた間違えようもない声に、弾かれたように振り向く。  
行方不明になっていたなんて思わせないくらいに平然とした顔で、こちらに向かつて歩いてくる、とたとした足取り。

星のゴムで二つに結んだ髪を揺らしながら、ピンクのワンピースを着た娘が私に飛びついた。

「ねえねえママ、さっきねえ、鳥さんがいたんだよ？ 美空ね、鳥さんといっぱいお話ししてーそれでね、ここで待っててって言われたの。ママ、迎えに来てくれるからって。そしたらやっぱり来てくれたねー！」

「美……空！」

「あのねえ、ママー美空、おなかすいたあ」

気が抜けるほどのいつもの調子で、訴えかけてくる娘の笑顔。

どこにも怪我もなく、さつき家を飛び出した時のままの姿で確かにここに 自分の腕の中にいる。

それがわかった瞬間、小さな背中を思いっきり抱きしめた。

「美空……ごめんね、ごめんね……！」

何度も呟きながら頬ずりする私に、きよとんとしていた美空は「美空もごめんね」と笑った。

すっかり手をつないだ帰り道、もう一度だけ振り返った竹林は既にいつもの静けさを取り戻していた。

あの男に出会ったことさえ幻だったような気がしていた私が美空と家に入った時、もう片方の手にしっかりと握られた何かに気づいた。「それ何？」

「あ、これ？ だからあ、さっき言った鳥さんのはねだよ。すっごくきれいだったからもらったの」

嬉しそうにニコニコ笑う美空の手には、真っ黒な鳥の羽根。

黒いそれはガラスのものにしては少し小さいように思えたけれど、何と言うこともない羽根だった。

きつと鳥を見つけて追いかけていて、道に迷ってでもいたんだろ

う。小さな子特有の夢物語だろうと笑い返した。

早めに入れたお風呂の間も、夕食の間もずっと鳥の話をしていた美空も、食べ終わった頃にはさすがに眠くなったのかソファでうつらうつらし始める。

「ケーキ食べるんでしょ？ ほら、もう少し起きてよう」

そのまま寝かせるか迷った挙句、やはり楽しみにしていたケーキを食べないとあとで悲しむだろうと肩をゆすった。

さっき二人で飾りつけた笹が、庭の物干し竿で揺れている。

空はまだ晴れ渡ったままで、綺麗な月が顔を見せていて、いきなりさっきの質問を思い出した。

あの時、なんで雨だなんて答えたんだろう。

黒髪の男に訊ねられた言葉に、半ば無意識に滑り出た回答。

なぜあの時満足そうな顔をされたのか、それもわからないけれど

なぜか今は、恐怖も綺麗さっぱり消えていた。

美空が無事だったからに他ならないとはいえ、自分も安易だなどと反省する。

もっと冷静に行動できたような、落ち着いてみればあんな男を相手にしている場合でもなかったはずなのに、何をしていたのか。

それに美空にもちゃんと一人で飛び出さないように、知らない人についていけないように、もう一度注意しておかなければ。

今更ながら回りだした頭を軽く振って、ケーキを切り分けようとした、その時だった。

がさがさ、と外の茂みから音がして、庭を覗いた私の目に、何か白い色が映ったのだ。

それが塀の影で動いた、誰かの人影だということがわかって、思わず悲鳴を上げそうになった。

椅子に腰掛けて、ケーキだけを見ていた美空がおびえないように、あわてて声を飲み込む。

泥棒？ それとも、もしかしてさっきの男？

笹を見るために網戸だけにしてあったから、美空の手前、いきな

り戸締りするのたまめられた。

再びがさがさ、と音がして、人影が隠れるように消えたのがわかる。

「なあに？ ネコさんかな？」

のんきな美空の声に曖昧に笑って、待ってるように言い置いた私は、こわごわ庭へ降りる。

一応ソファの影に常備してあるゴルフクラブ もちろん使いもしない、防犯用だ を背後に持って、そっと塀へ近づいていく。

もし泥棒や変質者だったらこんなもので戦うつもりはないけれど、何も持っていないよりは身を守る気がするのだ。

「だっ、誰！？ 家に何か用？ もし変なことしてたら、すぐ警察呼ぶわよ！」

もう片方の手に持っている携帯で、いつでもかけられるようにスタンバイしながら叫んだ。

一瞬静かだと思つた塀の外側で、再び大きな音が響いた。

がさがさと茂みをかきわけて、今度こそ塀によじのぼろうとしているような影が見えて、思い切り声を上げていた。

きゃあきゃあ言いながら、無我夢中でゴルフクラブを振りかざす。既に携帯は取り落として、冷静なつもりが滅茶苦茶な攻撃だけを繰り返していた。

「うわっ、ちよっ、ちよっつと やめろって！ 姫子！」

自分の名前を呼ばれた瞬間、いや、それよりも前にその声を聞いたその時に、もう少しで振り下ろしかけていたゴルフクラブを止めた。

力なく芝生の上に落ちたそれを拾うことも思いつかず、呆然と固まった私の背後から、美空が駆け寄ってくる軽やかな足音。

「ママあ、だあれ？」

ゴルフクラブの戦闘は、どうやらつけておいたアニメのDVDに夢中で見逃したらしく、何も疑っていない顔だった。

寝転がっていた間に少し崩れた髪形もそのまま、瞳をこすりな

がら。

「み、美空……」

ついに扉の内側に着地した人影が、無意識のようにその名を呼ぶ。きよとんとした顔で小首を傾げ、それからさくらんぼのような唇が満面の笑みを形作る。

「もしかして ひこぼしさま!? やっぱり来てくれたんだ!

美空のお願い、ちゃんとかなったんだあ、やったあ!」

まさに、ぱああつと輝いた表情で言われてしまったのは、続く言葉が見つからない。

同じく沈黙してしまつたもう一人の相手と思わず顔を見合わせてから、あわてて目を逸らした。

「ねえ、ママあ! やっぱり鳥さんの言うとおりだったよー! 美空、いい子にしたたからお空の神様をお願いごと聞いてくれたの!

ひこぼしさまだーひこぼしさまが来たー!」

田舎で育つたというだけではない、生来ののんびり屋な性格と、夢見がちなところ。

それは私が大好きな美空の長所だけれど 今ほど困つたことはなかつた。

だって、頭にまだ葉っぱのついた、くたびれた白いワイシャツのこの侵入者は。

「み、美空う、あのね……」

座り込んで、百五センチの美空と目線を合わせた彼は、何かを言おうとして結局あきらめたようだった。

遠慮がちに頭を掻くその仕草と目じりの下がった微笑みを見つめるのが、もう何年ぶりなのか数えることも放棄する。

「ひこぼしさまーいっしょにケーキ食べようよ! ほらっ、ママも来て早く切つてー!」

鼻歌までうたいながら駆け出して、我先にと食卓の椅子でスタンバイする美空に呼ばれてしまつては、そうしないわけにはいかなくて。

再び顔を見合わせた先で、情けない笑みを送ってくる相手にため息をついた。

「ひ、姫子　あのさ」

ぼそつと話しかけようとしてきた言葉を見無視するように素通りして、背中を向けたまま立ち止まる。

「美空が待つてるわよ。さっさと入ってくれば？」

複雑すぎる気持ちはとりあえず心の奥にしまいこんで、その声をかけていた。

何事か感激したように呟きながら入ってくる彼と、一瞬だけ一緒に笹飾りを見上げてしまった。

「言つとくけど　あなたの布団ないから」

目が合ったのが悔しくて言ったら、ソファで寝るからいいよ、なんて凶々しく返す。

そうだ、昔から調子のいいのだけは取り柄だった、かも。

あきれた顔で立ち止まっていたら、靴を脱いで先上がりこんだ彼は、ちゃっかり美空の隣に腰掛けてケーキナイフを取っている。

「まあ、いつか……七夕だし」

自分を納得させるように呟いて、折り紙の吹流しを指で弾いた。

なんとか歯磨きさせてベッドに寝かせると、はしやぎすぎた美空はすぐに軽い寝息を立て始めた。

階下へ向かいながら、さっきのはやっぱり夢だったんじゃないか、なんて思った自分の希望は見事に打ち砕かれて。

まだ濡れている髪をタオルで拭きながら、ちゃんと持ってきてたらしいパジャマを着ている男に手を振られて、何度目かのため息をつく。

「来るなら来るで、連絡してからにしてよね。まったく　本気で

泥棒かと思っただわ」

「これがもう二年ぶりの対面になるなんて思えないほど気安い態度で、くつろぎすぎている笑顔が憎たらしい。

以前は養育費を渡すといって訪ねてきていたこいつに、美空を混乱させるから来ないでくれと頼んだのは自分。

「だけどそれからすぐに連絡もメールだけになり、振込みしてからも何の音沙汰もないことをひそかに恨んだ。

それが矛盾していることなんてわかっていたから、意地でも自分から連絡なんてするものかと決めていたのだ。

「だってさあ、電話したって出てくれないだろうなあと思っただら怖くてかけられないし……それに、今日だって本当は来るつもりじゃなかったんだ」

少し癖のある髪　その生え際のあたりがわずかに薄くなっているのに気づいて、いつの間にこんなにならなうだろう、なんて考える。

自分だって、最近皺もシミも増えてきたことを自覚しているというのに、記憶の中にいた男が同じ道を辿ることが不思議だった。

「来るつもりじゃなかったって、どういうことよ」

「訊ねかけて、足元をふさいでいた彼の旅行カバンを脇によける。

開いたままだったカバンの中から、ふわりと舞い上がった何かを拾おうとして　つい呟いていた。

「これ……羽根？」

「うわっ、なんだろう。カラスかな？　そんなのいなかったんだけどおかしいなあ」

「気持ち悪いな、とかごちゃごちゃ言いながらカバンを探ると、他には見当たらなかったことにほっとしたのか、話は移り変わっていた。

「いや、ちょうどどこっち方面に出張中だし　最終の新幹線で帰るつもりだったんだけど、なんか急に気持ちが変わって」

「懐かしい駅名を見てたら立ち寄りたくなつたのだと頭を搔きなが



ら説明する。

それにしてもどうしてちゃんと玄関から訪ねて来ないのか、そんなことを説教しかけていた私は、まだ手に持ったままだった羽根に目をやる。

そういえばこれ……さつき美空が持ってたのと似てる。

大事に枕元に置いて寝たのを見ていたから、間違いない。

カラスより少しこぶりで、よく見るとつややかな黒い輝きを放っていた。

「姫子？　どうかした？」

また呼ばれて背中の中の辺りがくすぐったい気持ちになりながら、何気ない顔で外を見る。

軒先で静かに揺れている笹飾り　さつき竹林で出会った男が言った言葉が不意に蘇った。

『あなたのために願いを書いたことも知らないんでしょう？』

思い出したら気になって、呼び止められるのも構わず、網戸を開ける。

ピンク色の短冊に書かれたつたない文字を確認して、なぜか息をついた。

『おひめさまになりたい』

そう書いてある美空の願いごとを見て、何よ、と頭の中で悪態をつく。

私のために願いを書いたただなんて、訳のわからないことを言っ

て　やっぱり変な男だったんだ。

思い起こしても幻のような気さえする短い時間のやりとりを、今度こそ頭から追い出そうとした。

「あれっ？　雨だ」

突然背後から気の抜けた声がそう言って、我に返る。

あわてて見上げると、さつきまで綺麗に晴れていた夜空はどんより曇って、大きな雨粒がぱらぱらと落ち始めていたのだ。

眉を寄せて、外に出たその時　竹林の方角で、何か光ったよ  
うな気がして目をやる。

自分の目を疑う、という当然の思考も働かなくなる出来事が、そ  
こには起きていた。

長い長い竹　いや、笹が一本、竹林からまるで橋のように、空  
に向かって伸びている。

その上に小さく見えたものが飛び立ったことで、鳥だったのだと  
わかった。

黒い鳥は空中で人の姿に変わり、体重など感じさせぬ動きでその  
笹に腰掛けている。

口を開け、ただ見上げていた私の耳に響いたのは、確かに聞き覚  
えのある声。

『あの子がご褒美をくれたからね、ちゃんと役目を果たしたよ』  
いたずらっぽい口調で、そんなことを言われた気がした。

確かでなかったのは、遠すぎて姿もはつきりと見えなかったから。  
それなのにすぐ近くで囁かれているような言葉が不気味で、思わ  
ず自分の体を両腕で包んだ。

『願い、聞き届けたり』

声は、あの時と同じように、いや、まるで曇った夜空全体に響き  
渡っていくような感覚。

それが現実でなかったことがわかったのは、いつの間にか隣に立  
っていた男に肩を叩かれたから。

「どうしたの？　放心しちゃって。濡れるよ」

言われてまた見やった先の竹林にも、空にももちろん笹どころか、  
鳥一羽の姿もない。

いまや雨雲は空全体に広がっていて、シャワーのような雨が降り  
出していた。

雨だと答えた自分の言葉が当たったことに、奇妙な偶然を感じる。でもそれよりもおかしいのは、あの男のこと。説明したくてもうまくできる自信もなくて、結局話すのをやめました。

「あーあ、せつかく作ってきたのに濡れちゃったね」

あわてて取り込んだものの、折り紙の飾りが濡れているのを残念そうに眺めて、そう言う。

彼の言葉に自然に頷きかけて、顔を上げる。

「なんで保育園で作ってきたこと知ってるの？」

何も知らない彼なら、家で作ったと思ってもおかしくないのに、と微妙な違和感を覚えて訊ねた。

「そんなの　そりゃ、あれだよ。普通この時期、幼稚園とかでもらってくるもんだろ？　僕だって小さい時に覚えがあるしさ」

まあそれもそうかと思いなおしたら、安心したように彼が話を続ける。

「いやあそれにしても驚いたよ。久しぶりに会ったら美空が大きくなりすぎててさ。僕が見たのはまだショートカットの顔だったのに立派なお姉ちゃんになったなあ、男の子に混じって遊んでたのが嘘みたいだもんな」

「男の子に混じって遊んでたって……そんなこと話したっけ」

またひっかかって、話を遮る。

たちまち取り乱したように目を泳がせ、「いやっ、えっと　それは、そう、想像だよ！　姫子も昔そうだったって聞いてたから。それで」なんて答えている。

「そうよねえ、美空の成長は義務的にしか報告してなかったから、知ってるわけないわよねえ。もちろん、去年の夏骨折したことでって言わなかったもの」

「えっ！？　去年骨折　？　うそっ、僕が見た時には元気だったのに……！！」

目を見開いて言うてから、漫画みたいに両手で口を押さえる彼。

間抜けな行動にあきれるよりも、なんともいえない気持ちの  
中に広がっていく。

「あなた……もしかして美空のこと、見に来たりしてた？」

瞬きもせずに投げかけた質問。

動揺はわかりやすく両目に現れていたから、答えを聞かなくても  
すぐにわかった。

「やっぱり 道理で全然美空のこと聞きもしない訳だ。父親なの  
に、気にならないはずないわよね。薄情だって腹立ててた私のこと  
なんてほったらかしで、隠れて覗き見してたってこと」

「へーえ、ふーん、と嫌みしたらしく繰り返すと、額に汗まで滲ま  
せながら両手をぶんぶん振る。」

「いやっ、そんな、覗き見っていうか、たまにだよ、ごくたまに！  
だって姫子が何にも教えてくれないからさ、しょうがないじゃな  
いか！ っていうかそれより骨折って 何があっただよ、事故  
？」

「嘘に決まってるでしょ、そんなの」

「えっ？ 嘘？ ちよつと騙すなんてひどいよー！」

「ひどいのはどつちよ！ 電話一本よこさないで」

「だって会うのもだめって言ったの姫子だろう？」

「そもそも浮気したあんたが悪いんでしょうが！」

段々子供のケンカに発展しかけた言い争いは、それですぐに勢い  
をなくした。

たちまち静かになったリビングで、変なにらみ合いが続く。

「だからそれはもう何度も謝ったけど……悪いと思ってるよ。飲み  
すぎたところをちよつと誘惑されちゃって、つい」

「ちよつと誘惑されたからってふらふらその気になるのがおかしい  
って言ってるの」

「それは本当に僕が悪いって全面的に反省してるってば」  
年だけは取ってるのに、まるで成長してない子供。

それは自分も同じだとすぐに気づいて、口をつぐんだ。

気まずい沈黙の後に、何かに気づいたように彼が近寄ってきた。

「ねえ、姫子……泣いてるの？」

「泣いてなんかいないわよ」

肩に置かれた手を振り払って時計を見上げたらもう十一時過ぎで、急に現実が戻ってくるような気がした。

「明日も会社なんじゃないの。こんなところで泊まってないで、さっさと自分の家に帰れば」

今からじゃもちろん間に合わないことなんてわかっていたけど、意地悪な気持ちで言い捨てる。

戸惑った子犬のような顔で、彼はぽりぽりと頬を掻いた。

「僕は大丈夫だけど　姫子は、帰ってほしいの？」

「帰ってほしいかって……私なんかより、帰りを待ってる女でもないんでしょって言うてんの！」

腹立ち紛れに言い返したら、あんぐりと口を開けた後、彼が情けない笑顔を浮かべる。

「そんなのいるわけじゃないか。男やもめの一人暮らしだよ」  
嘘ばかり　そんな言葉が口から飛び出しそうになったけど、

そこまで責めるのはかえって不自然だと黙り込んだ。

「あのさ、姫子……」

「何よ」

「本当は僕、ずっとこうして帰ってきたかったんだ、けど……ダメかな？」

勢いよく抗議しかけて上げた顔は、思いのほか真剣な顔と視線を合わせたことで固まる。

「許してくれ、なんて言わない。言えない、から　僕、姫子が信じてくれるの待つからさ。今度こそ、絶対傷つけないって　誓うから」

白に水色なんてパステルなパジャマで、なんでそんな顔するのよ。

そんな、真剣な瞳で見たって、そんなの　。

「ずるいのよ、いつだってあなたは……」

思ったより、弱気な声が出た。

「姫子？」

不安げに呼ぶ声も、その瞳も、優しく差し伸べてくる手も、何もかも昔と変わらない。

だから、思ってしまったんじゃない。

どうしてこんなに、無駄な回り道をしてしまったんだろう、なんて。

ほだされちゃ、だめよ。

自分に言い聞かせる声は、派手な雨音に段々かき消されていく。

「私にだっていい男がいるかもしれないのに、そんなことも考えないで勝手に決めて　ずるいって言ってるの」

悔し紛れに小声で言ったら、なぜか安心したように彼は笑った。

「それなら大丈夫。だって僕、姫子が思ってるよりももっと、結構二人のこと見に来たりしちゃうってたからさ」

睨み付けると、悪びれずに舌まで出しちゃったりして。

これ以上なんて拒めばいいのかわからなかった。

だけど、それを教えてあげるのも悔しいから、私も笑った。

「そういうの、ストーカーって言うのよ」

呟いた言葉に声をあげて笑った彼に、冷えたビールを差し出した。外の雨を見ながら、彼が言う。

「ねえ、織姫と彦星は会えたかなあ？」

「いつの間にそんなにロマンチックになったの」

冷たく返して、それでも今は家の中におさまった笹飾りを眺める。そしてふと見つけた金色の短冊に目を止めた。

あれ、さっきまでこんななかったのに。

飾った短冊は確かに二つで、ピンクの美空のと、白の私の。

美空の健康を願った味気ない自分の短冊の隣で、ひらひらと扇風機の風に舞う金色。

翻ったそこに書いてある文字を見て、思わず立ち上がった。

「姫子……？ どうしたの」

手に取った金の短冊をそのままに、立ち尽くしている私の背中に彼が歩み寄ってくる。

彼の前でまた泣いてしまうことが恥ずかしくてたまらなかったけれど、一度あふれ出した涙はもう止まらなかった。

『ママがひこぼしさまとあえますように。パパでもいいです。みる紙いっぱいにぎちぎちに書いてあるその文字を見たのか、背後のため息なのか笑い声なのかわからない声をもらしている彼。』

「パパでも、かあ……」

少し寂しそうに自分の扱いの低さを嘆く言葉に、「自業自得ですよ」と言い返しながらも、曲がった背中を軽く叩いた。

不思議な偶然と複雑な事情とが絡み合った七夕が終わって、一ヶ月がたった今も、私は美空と二人で暮らしている。

離れて暮らしていた三年もの年月は、そう簡単に克服できるものではなくて、その一つであるお互いの職場の場所は変えられないから。

週末だけ東京からやってくる彼のことを、まだ美空が『ひこぼしさま』と呼んでいるのが目下の問題。

「いいかげん、パパだって教えてやってくれないかなあ」

今日も私の耳元でそっとこぼす言葉を、笑って聞き流した。

「だって、夢を壊したくないんだもの。それに、まだあなたのことちゃんと紹介できる自信ないしー」

「なんだよそれ」

「パパだって紹介したのに、またどっかでふらふらーって浮気でもされたら今度こそ離婚だから」

そしたら美空がかわいそうでしょ、と笑顔で釘を刺す私に、彼の

顔色が変わる。

「もうしない、絶対しないって！　ねえ、お願いだからちゃんとパダって紹介してくれよ」

情けない声で追いかけてくる彼に、黙るように人差し指で合図して、リビングの扉を開けた。

「何をしないの？」

ソファで絵本を読んでいた美空に訊ねられ、聞こえていたのかとびっくりとする。

が、聞こえたのはそこだけだったようで、きよとんとしていたから、笑ってごまかした。

「何でもないよ。あ、それ前に図書館で借りてきた本？　美空、また読んでるんだ」

「うん。だって好きなんだもん」

二週間の貸し出し期限ぎりぎりに迫っている絵本は、『ひこぼしさま』と二人で借りてきたもの。

子供向けの七夕の昔話や、行事の起源などをわかりやすく載せてある本で、よっぱど気に入ったのか借りてきてから毎日開いていた。

「あ、そうそう、ママ！　ここに鳥さんのってるんだよ？　ほら、見てみて！」

呼ばれて見せられたのは、真っ黒な羽に、お腹の部分だけが白色をした、カラスより小さめの鳥。

その羽根がよく見ると背中の部分だけ、紺色に近い黒をしていることで、思い出したのは。

「あの時の鳥さん。おしゃべりも上手なんだよー。美空、まだはね大事にもってるんだ」

嬉しそうな声で話し続ける美空の声も頭半分、絵本の説明に目を走らせた。

そこは小さく、『保護者の方へ』という説明書きになっていて、読んであげる時にもつい飛ばしていたところだった。

『かささぎの渡せる橋におく霜のしろきを見れば夜ぞ更けにける』



百人一首に出てくる歌から解説は始まっていて、それはもともと冬の歌で、七夕について詠んだものではないけれど、実は中国では有名な七夕伝説を連想させるものだという。

増水で川が渡れなくなつた織姫をかわいそうに思つたカササギが自ら橋になつた、という言い伝えや、天の神様に命じられてカササギがそうしたのだといういわれもあるらしいが、どちらにしる引き裂かれた二人の架け橋となつた鳥だと書いてあつた。

なぜかあの時見た幻の男と、その羽色が重なって見えて、頭を振つた。

「ママ、どうしたのお？」

「う、ううん、何でも。美空、この鳥さん見たの？」

「そうだよ。一人で走っていつちゃつた時、この鳥さんに会つてねえ。いろいろお話したの。それでね、お願いごとかなえてくれるつて言つたから、かわりに美空のゆびわあげたんだ」

いつも夢物語だと思つて聞き流していた美空の言葉だつた。

でもこれだけはつきりと話をされては気になって、なんだか胸がどきどきしてくる。

「指輪つてもしかして　美空が大切にしてたあのハートの指輪？」

「うん！」

この前おもちゃのアクセサリー入れを片付けていて、なくなつていふことに気づいたものの、つきり部屋のどこかに落ちているのだからと気にしていなかつたもの。

それはただのお菓子のおまけだつたけれど、きらきら綺麗な金色の指輪にピンクのハートの石がついていて、美空が一番好きだつた宝物。

あの時はめていたかどうかも定かでない自分とは違い、美空ならもし間違つて落としていたら泣いて大騒ぎしてははずだ。

それなのに、宝物の指輪と引き換えにしてまで願つてくれたといふのだろうか。

『ママがひこぼしさまとあえますように』

拙い字で書いてあった金の短冊は、ひそかにダンスの引き出しにしまつてある。

何事かときよとんとしている彼と目を合わせて、私は笑つた。

「なになに……この鳥さん、光るものが大好きで、いたずら好きなところがあるんだつて。佐賀県の天然記念物なんだつてよ。」

「てんねんきねんぶつつてなに？」

「うーんとね、すごく珍しいつてこと。それなのに美空は会えてよかつたね。」

「うん！ そつかあ、光るものが好きだから、美空のゆびわよろこんでくれたんだね！」

無垢な顔で笑つ美空に微笑んで、まさかね、とあの端正な顔を思い浮かべた。

説明の付かない出来事が、こんな風に自分のまわりで起こるなんて夢にも考えなかつたけれど、それがこんな優しい奇跡なら、感謝してもいいのかもしれない。

「なに二人だけでもりあがつてるんだよー僕にも教えてよ。」

話に入れないのが悔しいのか、唇をとがらせて割つて入ってきた彼に、内緒、と舌を出した。

「ええ〜ずるいよ姫子お。」

あきらめきれないように羽交い絞めにされて、私は笑う。

「そうね、来年ぐらいなら教えてあげてもいいけど。」

「そんなあ。」

何だかわからずに美空も笑つて、一瞬だけ三人家族に戻れた気がした。

そうね、来年の七夕は、家族そろつて迎えられたらいいな。

素直にそう思えたことが、一番嬉しかった。



(後書き)

なんとか七夕に間に合わせたかったのですが無理で、今日のせるために急ぎました。

あちこちボロが出ているかもしれませんが、また後ほど確認して、自サイトにも掲載したいと思っています。

ご感想等いただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4435m/>

---

かささぎの、渡せる橋に願いをのせて。

2010年10月8日14時14分発行